

# 生存科学研究 ニュース

VOL. 8, NO. 4, 1993. 7. 10. 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-3563-3518

## 第6回東西の健康観・医・薬研究会 東洋的 老いはあるか？

3月11日午後1時半より、上記のテーマで、医療史家・新村拓委員と、前東京慈恵会医科大学精神科教授・新福尚武氏によって報告がなされた。

新村氏は「文化としての老い」と題して、歴史学者の立場から、日本中世から近世にかけての老いの意味について述べられた。

老いは、社会の階段を登りつめ、老熟、円熟、人格完成し、分別、道理をかねた理想的な姿としてあらわされており、negative image は勿論あるが、現代に比べてより positive imageの老いが存在した。

近世からの老人の絶対数の増加、閉鎖的で完結した「家」への変化、さらに近代化にともなう、核家族化、職住分離、欧化政策などにより、老人問題は発生した。

老いは子供の成長と同じで、そこでのさまざまな徴憑も一つの個性としてとらえるべきであり、老人との共存によって、個人・社会ともに厚み加わるべきものである、とされた。

ついで、新福氏は「近代人にとっての老い」と題し、50年以上に及ぶ精神科医としての臨床と研究にもとづき報告された。

知能は必ずしも全体的に衰えるのではなく

精神の老化には著しい機能差・個人差がある。「正常」と「痴呆」の間には、「ぼけ」を中心とする異質的な広いカテゴリーがある。現代の老人にとっては、心身症、痴呆、精神病などの疾患カテゴリーよりも、「空しい」「生きがいがない」と感ずることがより重要な問題要因である。

日本文化に親しみのある老人のイメージとしては、「老賢者」(Jung)は少なく、「翁」、「風流人」が多い。

最後に、力、スピード、持久力、生産力に表わされる「若さ」に特別な価値をおく近代社会の本質を見直すことが必要であり、Alzheimer病の本態やボケのリスクファクターなどとともに、正常な加齢現象に関する基礎研究がもっとなされる必要があるとされた。

なお、5月14日開催の第7回研究会「メディアのなかの東洋医学」は、次号のニュースで紹介の予定。

## 会員研究会「生死と生存」第5回 植物の基本的生態について ～植物の生命を見直す

5月22日(土)第5回(平成5年度第1回)「生死と生存」会員研究会が研究所会議室において開催され、第2回に引き続き花園大学立花吉茂教授が、前回のテーマ「植物学を中心とする生態学」の一応のまとめとして

表記の主題で発表した。

地球上の植物分布、植物の寿命、動物との違い、水の輸送と栄養、種子の寿命と発芽などについて基本的概念や基礎的事項を説明。そのなかで氏は、20世紀において生物学は確かに分子生物学などミクロの生物学での進歩はあったが、マクロの生物学である生態学での大きな進歩はなかったこと、また最近では生態学においてもミクロ化が進んでいることを指摘した。植物自体のことについては充分に分かっているとはまだまだ言えず、例えば、植物の寿命など、野生植物に関しては研究が遅れていると強調した。しかし植物の分布や遷移と、環境との関連の研究は今日の環境問題への取組に多大の示唆を与えていることを述べた。最後に、自然科学は本当に進歩したといえるのか、テクノロジーの進歩だけがあったのではないかとの問題を提起し、特に人口の増加に対する憂慮を提示した。

第6回 生存秩序と人間関係研究会  
脳と行動の階層性

5月25日(火)午後6時より開催された研究会において、上智大学生命科学研究所青木精教授は表記の標題で以下のように発表した。

めんふくろうは、音と図形を一体としてとらえるが、その機構が脳の中にできている。音は鼓膜から周波数として入ってくるが、それを脳で計算して地図を書き上げる。研究を進めるための仮説として、脳は生存と生殖のためにあり、その情報をコントロールし、処理していく、と考え、手法としては単一ニューロンと行動の研究で解明された。

めんふくろうは音を聞いたからそれを覚えて計算し、位置付けしてから顔を向ける。蝸牛殻外側核の細胞電位活動を見ると、空間のある位置からの音に対応している。その処理には音圧差経路と時間差経路との並列回路が脳にあり、ジェフリスの時間差検出モデルと同様の構造が層状核にみられる。音の情報を伝

える神経繊維が伸びている先の核の一部を破壊すると、それに対応した音源定位ができなくなるが、ふくろうの行動で確認できる。

生存にとって意味のあるものは進化の過程で発達する。人間が大腦皮質であるような地図づくりを鳥でもおこなっている。このような脳の機能は、進化の過程の長い環境との接触でできたものであり、動物は一番自分に都合の良いように適応して使っている。

会員研究会「生存と経済」第6回  
国民医療をみる新しい眼

6月19日(土)午後2時半よりの研究会で座長の帝京大学経済研究所江見康一教授が、同研究所で発刊した『国民医療の構造分析(2)』の内容を紹介しながら表記のテーマで下記のように発表した。

生存研の研究誌『生存科学』平成4年9月号(Vol.3.No.1.)に「環境と人間と経済」と題して発表した。生存科学とは、生命科学と環境科学を総合化した、人間が生きていくための生存体系の学問であろう。人間は生命を保つために食べなければならないが、それには誰かが生産しなければならないし、働かなければならない。そこに食べるという営みと経済との接点がある。生命と環境とを繋ぐことを目指す生存科学の、その橋渡しをするものとして経済学、社会学を考えたとき、その経済学は単なる市場の経済学ではなく、生命と環境を繋ぐ経済学として、メディコエコノミックスという新しい概念でないとそのインテグレートはできない。これからは、経済ブロックと自然ブロックと人口ブロックの相互関連のフローを考えると、これまでの動脈的流れだけではなく、例えば廃棄物のような静脈的流れも考えなければならない。

明治維新以後の急激な経済成長と人口増加は、経済成長の制約条件を技術革新によりクリアしてきたが、今や、資源・環境の制約条件により抑制されるようになった。21世

紀は成長ではなく現在の水準維持が課題となる。上り坂にあるときの競争や効率、中央集権、企業社会等の論理や倫理から、今後は安定や公正、秩序等の論理と倫理が重んじられるようになるであろう。

医療経済学とは、医業として医療を継続するための再生産を考えるうえに必要な経済学である。人生の各時期での福祉・医療需要を見極めること、制度的制約要因、医学・医療・医業の進歩、医療関連職種の教育、産業構造と経済成長、人口増加・核家族化・高齢化・生活様式の都市化等の各要因の把握、サービス産業としてとらえた医療の生産性（特に高度機器医療時代の医療経済、高齢化に伴うターミナルケアの医療経済）の検討等々を分析して示す。

医学・医療は転換期にある。現代の医学・医療は、自然（環境）と人間生存との調和を求めて、両者を取り結ぶ技術と社会システムのあり方およびその倫理的基礎がいかにあるべきか、という根本的問いかけの中で、自らの使命・機能を位置付けなければならない。これがとりもなおさず国民医療をみる新しい眼でもある。

#### 「科学技術・生存・評価」研究会

今年度から、大阪大学名誉教授筑井甚吉生存研副理事長を中心に新たに始まる表記研究会の準備会が5月31日（月）に開催された。具体的な課題に取り組みながら、生存科学の立場からの評価のあり方を研究していく予定。

#### 第1回「人間・情報・秩序」研究会

今年度から始まる基本構想委員会の柱となる3つの小委員会の一つ、表記研究委員会が6月14日（月）開催され、これからの研究の進め方等についてフリーディスカッション

をした。メンバーは小林登、清水博、石井威望の各氏だが、今後の追加を予定している。

なお、この他の2つの小委員会は、板垣與一橋大学名誉教授の主宰する「人間・文化・文明」研究会と、江橋節郎前岡崎国立共同研究機構長の主宰する「科学技術と生存」（高度機能からのアプローチとライフサイエンスからのアプローチ）である。

#### 九州プロジェクト別府研究報告書 反省会

5月17日（月）研究所会議室において、上京していた別府市中村市長をまじえ研究に参加したメンバーにより、先に完成した昨年度の別府研究報告書『別府市の総合調査研究の基本構想—「人間回復都市べっぶ」の実践的展開のための報告書—』をめぐる研究ならびに報告書の反省と、より具体化、総合化を図るための今年度の研究の進め方について討議が行われた。

これを受け、6月28日、研究メンバーは再度別府を訪れ、現地研究会を開催した。

#### 東北プロジェクト 第6回「安家の将来を考える会」

5月22日（土）午後7時より9時半まで、岩泉町安家の公民館において、安家の人達と小泉浩郎会員、さらに今回は小平専務理事他が参加して会が開かれ、安家の土壌でしか充分に育たない安家赤大根、農業に極めて熱心に取り組む年々部落の生活態度の例や、地元の人達が参加している安家のたたら（鉄山）遺跡発掘作業、由緒あるつつじの発見、縄文土器の見直しなどから、今迄埋れていた安家の文化への関心を深め、これからの生活改善への活力が高められるのではないかと、等々が熱心に話し合われた。

九州プロジェクト肝属研究会  
健やかに生きるまち肝属郡  
プロジェクト 現地研究会

6月17日(木)、生存研役員、研究会メンバーが鹿児島県の肝属を訪れ、肝属医師会病院会議室において表記研究会を開催した。

新たに生存研理事に就任する肝属医師会病院今隈院長を座長とし、医師会病院関係者、黒木医師会長他の医師会関係者、佐多、根占、大根占、田代(南隅)の4町の住民担当職員が出席して、本研究の目的と進め方、現地の医療・保健・福祉の問題点等に関して協議した。

これに前後して、生存研役員等は佐多、根占、大根占、田代の各町を訪問した。

平成5年度第1回、第2回理事会

5月18日(火)、平成5年度第1回理事会が評議員会に引き続き開催され、平成5年度事業計画と予算案が審議、承認された。また役員任期満了に伴う平成5年度の新役員が選任された。さらに6月15日(火)には、第2回理事会が開催され、平成5年度の新評議員、顧問が選任された後、評議員会と引き続き理事会が開催され、平成4年度事業報告と決算、ならびに寄付行為の改訂が審議され、承認された。今回の寄付行為改訂により評議員会の責務が一層重くなった。

平成5年度事業計画では、これまでの幾つかの関連領域にわたるやや総合的な各種グループ別の諸研究と地域実践的な諸研究のほか、愈々、これらの成果をあらゆる角度から検討する生存科学に相応しい総合的な研究の場を、新たに基本構想委員会として実現する運びとなっている。基本構想委員会のメンバーの方々の多くは新評議員としても参加していただく。

(新しい理事、監事、役員、評議員、顧問の名簿は添付の追補版を御覧ください)

公益信託武見記念生存科学研究基金  
平成5年度第1回運営委員会

6月22日(火)研究所会議室において板垣與一新運営委員長の下に開催された運営委員会において、平成4年度事業報告、決算の審議の後、平成5年度の武見記念賞授賞について協議され、運営委員会が選考規定を作り選考を行うこととなり、記念賞受賞候補者の推薦を財団法人生存科学研究所と公益信託武見記念生存科学研究基金の関係者に依頼することとなった。

ハーバード大学武見講座活動報告

報告者 吉田フェロー

Takemi Program Seminar

4/19 Global Health Expenditures

/R.Govindaraj

4/26 Maternal Health Care and the  
Ritual of Birth/C.Obermeyer

4/27 Strengthening Human Resources in  
Developing Countries/P.Rosenfield

5/ 3 Health Policy in Bangladesh  
/M.Bennish

5/10 The Dogma of Causality and  
Evolutionary Approaches in Public  
Health /I.Eckardt

Takemi Luncheon

4/22 Weekly Luncheon

Final Research Presentation

5/17 M.Prakasanna

5/20 T.Yoshida

5/24 D.Obikeze

6/ 3 P.Mohankumar

6/ 7 M.Deng

研究所日報

5月24日(月)編集委員会

6月28日(月)福岡県宗像市宗像

医師会病院草場院長来所